



白の皇国物語 4

ALPHAT

白沢戌亥
Inui Shirasawa



アルファイト文庫 



ガラハ

ダークエルフ族で、
パラティオン要塞防衛軍司令官

リーデ

皇国陸軍参謀大尉。
前戦役で殉職した英雄ガリアンの娘

グロリエ

新生アルマダ帝国第十三皇女。
通称“戦狂姫”

グールドデン

氷狼族の青年。
皇国の反攻作戦で先導を
務めることになる

ウイリア

メリエラの侍女。〈龍殺し〉であり、
レクティファールの天敵(?)

リリシア

レクティファールの婚約者。
四界神殿の巫女姫

メリエラ

レクティファールの婚約者。
現在は近衛軍所属の侍従武官

レクティファール

本編の主人公。
〈アルトステニア皇国〉
摂政にして次期皇王

主な登場人物

第七章	戦いが生んだもの	304
第六章	龍虎相搏 <small>リウコウソウバク</small>	223
第五章	砲火	195
第四章	烽火 <small>のろし</small> 上がる	160
第三章	戦いへ	96
第二章	戦いの兆 <small>きざし</small>	40
第一章	皇都にて	8

目次



それは愚^{おろ}かしくも心の浮き立つような時代だった。

何もかもが目まぐるしく入れ替わり、誰もが明日へ明日へと突き進んだ。

今の平穏な時代しか知らない者たちから見れば、野蛮^{やほん}で癡^{どろ}猛^{もう}で、救いのない時代だったように思えるかもしれないが、当時の自分たちはそんなことを露^{つひ}ほども考えず、その日その日の変化に適^あ応^うしようとして躍^{やっ}起^きになっていたものだ。

人が成長するように、国が栄^{さか}え滅^めびるように、時代もまた成長し、栄^{さか}え、滅^めぶ。いつか自分たちのこの文明も、第一次文明のように滅^めびるだろう。

人によっては、それについて幾^{いく}らでも言いたいことがあるだろうが、滅^めびもまた必要なことなのだと思^{おも}う。

この文明を苗^{なえど}床^どにして、新たな文明が花開^{はな}く。それは親から子へと続く生命^{れん}の連鎖^{れん}のよ^ように、この世界の中で生きる文明にとって自然なことだとは思^{おも}えないだろうか。

第一章 皇都にて

明るい光の中で、彼は優しく微笑ほほえんでいた。

少女の総すべてを受け容いれるように、少女の背負う重荷を受け容いれるように。

他の誰にもできない、彼だけの笑顔。

この国で生まれ、この国で育ち、それ故ゆに、少女とその重い役割を知る者には決して浮かべることができない彼の表情に、彼女は惹ひかれた。

知らぬ故に少女自身を見詰め、理解できぬが故に少女自身を理解しようとする彼の姿に心打たれた。

役目を果たし、彼の内なる世界で揺蕩たゆう彼女を呼び起こした声。

久しく聞いていなかった名前。

姉以外の誰もが口にしなかった彼女の名を、彼は呼んでくれた。

あの声を聞き、自分は自分なのだと思えた。

抱き上げられ、自分は此処ここにいてもいいのだと思えた。

リリシア、と。あの人に呼んでもらえるのなら、他に何もいらない。

巫女姫の肩書きさえ、彼の隣はなに侍るための道具に過ぎないのだから——

皇都イクシード。

当代皇王とその支持貴族によって戦火に晒さらされた皇国最大の都市は、新たな皇国の主である一人の青年の出現によって再びその栄華えいを取り戻そうとしていた。

都市外へと疎開そかいしていた住民たちが我が家へと帰り、鋤戸あきどを固く閉じていた商店は次々と店を開く。学校や公園には子どもたちはしゃぐ声が蘇よみがえり、路面列車や乗合馬車、乗合魔動車には明るい表情の住民たちの姿があった。

住民や商店を相手にする卸業者の隊商もまた皇都へと舞い戻り、市場は多くの人々で賑わっている。呼び込みや値段交渉の声は幾重いくえにも重なり、とある屋台の商店主は、懐うちかしささえ感じるその喧騒けんそうに目尻めじりを濡らした。

そんな彼の屋台に、真昼間から酒を楽しむ二人の男がいた。

「皇太子殿下は北に向かわれたそうなの……」

「んだ。帝国のグロ——何とかというお姫さまが軍隊を引き連れて攻めてきたらしい」

「おうおう、おつかねえなあ。そういや、うちの婿むこの実家が確か北の方での、向こうの旦那だんなが今年が雪が早いとか言っておったわ」

「んだら、皇太子さまのお帰日も早いかもしれんな」

「だと良いのう。お城には巫女姫さましかおらんで、さぞ寂しがるう」

「大層めんこい子じゃつたに、皇太子さまもさぞかし向こうで心配しとるじゃろ」

「そりやそうだ」

「かか」と笑い、祝の酒を酌み交わす二人。彼らは今朝方皇都に荷物を届けに来た商会の人間だった。

大分老いを重ねた彼らにしてみれば、皇太子も巫女姫も孫と言っている程の年齢だ。皇太子に対する忠誠心も巫女姫に対する崇敬の念もあるが、まず彼らに対して抱くのは若い雛鳥に向ける愛情だった。見ていて思わず微笑んでしまうようなそれだ。

できるならば、雛たちには健やかに過ごして貰いたいと思う。

この皇都を襲った未曾有の惨禍に終止符を打ち、今また外からの脅威に立ち向かっている皇太子。

その皇太子を支える宿命を負い、ただ一人広大な皇城に残された巫女姫。

人々は、彼ら自身が考えているよりも彼らのことを想っていた。

幸せな夢だった。

今は遠く北の大地にいるあの人が、自分の隣にいる夢。

だからだろう、目が覚めたときに酷く虚しい気持ちになったのは。

隣に誰もおらず、目を開けてもただ窓掛けが朝日に揺れるばかり。

その向こうに見える清々しいまでの青空さえ、憎く思えた。

「起きよう……」

上半身を起こし、ともすれば沈み込む思考を晴らそうと、少し強く頭を振る。

さらさらとした薄絹の夜着が肌に擦れた。身体を締め付ける下着は安眠に良くない、と神殿付きの女官に教えられて以来、就寝時には下着を着けなくなった。それから大分経つから、鋭敏な素肌を夜着が擦るのも慣れた感触だ。

肩からずり落ちた夜着を整えることもせず、彼女は寝台の上に座り込む。

透けるように白い肌と艶やかな翡翠の髪、そして身に纏う衣は薄い夜着だけという非現実的なまでに扇情的な姿は、間違いない世の男どもが夢想してやまない理想の女の姿だった。それが今年十四になったばかりの少女が具現化しているとは、彼らとて想像できないだろう。

だが、少女自身がそうであろうとしている訳ではない。

彼女は、自分が心の底から想うた一人の男のためにこの姿を手に入れた。彼女にとつて最も大切なのはその男であり、自身の容姿など所詮副次的なものだった。

以前から美しく在りたいという気持ちはある。

しかしその願いは人から『美しくあるべき』と教えられたからこそで、彼女が自ら見付けた願望ではなかった。

彼女が本当の意味で自分の容姿に気を配るようになったのは、やはりあの青年に心惹かれてからだろう。

雪のような素肌に布の跡がつかないようにと夜着を選び、それこそ件の青年以外の異性に見せることはないであろう身体の隅々にまで目を配る日々。神殿にいた頃から付いてくれている女官など、少女のそんな姿に「あらあら」と嬉しそうに笑みを浮かべたほどだ。

元々の資質もあつたのだから、今の少女は絵画に残しても誰一人異論を唱えることができないほど美しくなつた。

未成熟であるが故に滲み出る艶。

熟れきつた者にも、成熟の途上にある者にもない独特の艶気は、密かに後宮の職員たちの間で噂になっていた。

「あんなにも可憐な巫女姫さまを娶られる摂政殿下は大陸一の果報者」

そう後宮の者たちが評するのも無理はない。

少なくとも今の少女は、皇都近くの離宮にいるもう一人の女性——美しく在ることこそが存在意義の『蕃の姫』に匹敵するだけの麗姿を持つているのだから。

「レクティファール様は、今何をしていらつしやるのでしょうか」

そんな彼女だが、浮かぶ表情は憂いを多分に秘めたものだった。

こんこんと部屋に響いた軽い音に振り返る最中も、その憂いが消えることはない。

そして、どうぞ、と音の主を招き入れる声もまた、何処と無く沈んでいた。

「失礼します、猥下」

音も立てずに扉を開け、二つお辞儀をした女官。重厚そうな扉だが、閉める音もなかった。

「メチエリ、おはよう」

「おはようございます、お目覚めでしたか」

メチエリと呼ばれた女官は、隙のない所作で少女——リリシアの座る寝台へと歩み寄る。

深い紫の髪を頭頂部で一纏めにし、端正な顔立ちの彼女であるが、何よりも一番人の目を引くのはその鋭い眼だろう。まるで抜き身の刃のようだと評されるその眼は、今は主人であるリリシアをじっと見詰めていた。

「いい夢を見ていたのだけど、やっぱり夢は夢だった。起きたら少し寂しくなつてしまつたの」

「良い夢ほど現実との落差に虚しさを覚えるものです。——おそらく、これから幾度も同じ経験をなさるでしょう」

「ええ、きつとそうでしょうね」

リリシアはうつすらと笑んだ。

確かに笑っていないながら、しかし感情を窺うことのできない空虚くうきょと言う他ないその顔に、メチエリは眉をひくりと跳ね上げた。

「猥下……」

呼んではみたものの、続ける言葉が無いメチエリ。

彼女は後宮を守る皇族最後の盾——『機甲乙女騎士団』の一員として多くの妃を見てきたが、これほど若い第一妃候補は初めてだった。それどころか、皇太子と正式に婚儀こんぎを行っていない妃「候補」を迎えたことも初めての経験で、リリシアとどのように接するべきか悩む部分も未だに多い。

メチエリの懊悩あうなうを悟ったか、リリシアは小さく微笑んで言った。

「沐浴そとよくの準備をお願い」

「はい」

両手を揃え、頭かしらを垂れるメチエリ。

近衛軍侍女大尉としてリリシア付き侍女頭がしらを任されて以来、彼女はずっと悩み続けていた。

この少女の笑顔が、どうしても泣き顔に見えたから。

沐浴そとよくを済ませたリリシアは、朝食までの時間を中庭にある大聖堂で過ごしていた。

後宮の中心にある中庭は広く、そこに点在する庭園では多くの樹木草花が皇妃たちの目を楽たのませていた。

石造りの遺跡庭園もあれば、イズモ様式の枯山水かれさんすいもあり、さらには南国の気候を再現した温室もある。中庭の中央近くの湖には多くの野鳥が訪れ、さらには庭園で放し飼いにされている鳥たちも季節相応の姿を見せてくれた。

しかし、そんな優美な印象とは裏腹に、後宮とはただ皇王とその妃が暮らすだけの施設ではない。皇王と皇族を守る最後の砦だ。その証拠に、この後宮で働く二〇〇〇人の侍女女官は総て、近衛軍の軍人、『機甲乙女騎士団』の団員だった。

洗濯物を洗う侍女、後宮内を掃除する女官、庭師たちでさえも『機甲乙女騎士団』の一員。彼女たちはいずれも男を知らず、騎士団の名の通り「乙女」としてこの後宮で働き続けている。

そして、近衛軍部隊で最も平均年齢が低い。その所以は男を知り、その名を「乙女」から「女」へと変えた女性はこの騎士団から別部隊へと異動になるからだ。

近衛軍は個人の恋愛に口を出さないが、結婚せずとも「女」になれば『機甲乙女騎士団』に所属することはできなくなる。それは後宮に在るべき男が皇王と、女皇の配偶者のみで、彼らの手が付いた場合を考慮してのことだった。

女皇の配偶者の手が付いた場合、それは問題にはならない。生まれてくる子どもには皇

族としての資格は当然無く、ただの私生児に過ぎない。

だが、皇王の手が付いた場合はどうなるか。

これは言うまでもなく、皇族名簿に記載される立場となる。無論、母親の意向によつては名簿に記載されること無く生涯を閉じることもあるだろう、だが、母親である団員が皇妃となれば子どもは準皇族となり、有力な貴族に養子として出される場合も考えられる。

そんなとき、父親が皇王でないと発覚したらどうなるか。

これまでも皇王の手が付き皇妃や側妃そばにとなった団員は存在した。それらの産んだ子どもたちは貴族や有力な名家の養子となっており、万が一父親が別に存在するとなれば、間違いなく皇王家の権威は大きく傷付くことになる。

いや、実はこれまでの歴史でそのような事例が一度だけ存在した。

当時は『機甲乙女騎士団』が存在せず、近衛軍の女性のみの部隊が後宮の警護役だった。ときの皇王はその中の一人を見初め、召し上げた。

皇王の手が付いた時点では、確かにその団員は男を知らず、近衛軍を統括する皇王府もまた、皇王の意向に沿つて彼女の皇妃入りを認めたのだ。

彼女はやがて皇王の子どもを身籠り、出産。

しかし、その後の検査にてとんでもない事態が発生したのだ。

皇妃の産んだ子が、皇王の子ではないと発覚したのだ。

皇国の象徴たるべき皇妃の一人が、あろうことか他の男と姦通かんつうしていた——皇王府も政府も、他の皇族も大いに揺れた。

議会は荒れ、流れた噂によつて国民も動揺した。

何よりも、皇王自身が心に多大な衝撃を受け、床に伏せてしまった。

皇妃は後宮から離宮へと移され、蟄居ちつきよ。後に病死。

皇妃の元上司である近衛軍総司令官は責任を取つて辞任し、その数日後、自宅で自刃。皇妃の実家も夜逃げ同然に国を出奔し、この事件は皇国史上最悪の不祥事ふしやうじとなつてしまった。

だが、皇王府と近衛軍の捜査によつて明かされた真実は、大して珍しくも無いことだった。皇妃となった女性には、幼馴染おさななじみの許嫁いらいづけがいたのだ。

幼少の頃に結婚の約束を交わしており、それは両家も承知の上。

ある家具職人の弟子になつていた男が社会的に自立したら、正式に夫婦となる予定であつた。

しかし、近衛軍に属していた女は皇王に見初められ、流されるままその愛を受けてしまった。

それだけであればただ手が付いただけ、女が身を引けば大きな問題にはならなかつたはずだ。だが、女の実家が欲を出してしまった。皇王から娘の皇妃入りを求められた際、そ

れを受けてしまったのだ。

女は悲しみを押し殺し、家のため後宮へと上った。

だが、悲しみは癒えることなく、彼女は独り立ちし、一人前の家具職人となっていた幼馴染に家具を頼みたいと願った。そして、当時は皇王の許可さえあれば一部の部外者も立ち入ることができた後宮内へと彼を招き入れた。

元近衛軍の女には、後宮内の警備の穴を突くことなど難しいことではなかった。

彼女は幼馴染と、後宮内で密通した。

幾度も、幾度も、新しい家具を作りたいと、少し家具に手を入れたいと言い、男を招いた。おそらく、彼女と幼馴染の密通に気付いていた近衛軍の軍人もいただろう。

だが、彼女の境遇に同情した元同僚たちは、その密通を上司に報告することも、止めることもしなかった。

そして、あの後宮史上最悪の事件が起きた。

事件後、すぐに近衛軍は『機甲乙女騎士団』を設立。所属団員の厳正な選抜と厳格な服務規程を定め、このような事件が二度と発生しないよう現在の後宮の形へと制度を切り替えた。

例外なく、一切の部外者の立ち入りを禁止。

皇妃たちには専属の護衛隊を付け、いかなる状況下であつても傍を離れることがない警

備体制を作り上げた。これは皇妃自身も望んでも覆らない。

実際、リリシアが就寝している隣の部屋には、常時一個分隊の護衛が待機しており、彼女の行動を監視し続けていた。

今このとき、リリシアが礼拝を行っている最中も、護衛隊は大聖堂の中に散らばり己の職務を果たしていたのだ。

「侍女大尉殿、本日の予定のことなのですが……」

礼拝堂の入口近くに立ち、礼拝のため祭壇の前で跪くリリシアの姿を視界の端に捉えていたメチエリの下に一人の部下が駆け寄ってきた。メチエリと同じく侍女服姿だが、襟元の階級章は准尉のものであった。

「どうした、何か予定に変更か？」

「は、実は——」

メチエリの耳に口を寄せ、囁く准尉。

その言葉を聞いたメチエリの目は大きく見開かれ、表情は強張った。

「まさか、パールフェル妃殿下が……」

「どうなさいますか？ 司令部からは陛下の意向を是とせよとの命令が届いておりますが……」

准尉の問いに、メチエリは疲れたように頭を振った。

「ならば、狛下びわかに直接伺うしかあるまい。——今上陛下の第一妃、パールフェル殿下がお会いしたいと仰つてゐると」



リリシアの答えは是だつた。

今上皇王は公的に未だ皇王である。

ならばその妃は後宮を退いても皇王第一妃であり、未だ正式な皇妃ではないリリシアにその誘いを断ることはできない。

ただ、パールフェルの誘いよりも前に決められていた予定に関しては、これを優先することにした。

予定とは今回の騒乱で傷付いた国民の慰撫いぶであり、都市外に建設された難民避難施設の慰問いもんを行つたり、神殿の運営する病院などに足を運んで入院患者を見舞うことだった。

これをパールフェル側に打診すると、すぐに承諾するとの返事がきた。

本人もリリシアと同じく、国民のために少しでも行動したいと願つてゐる。

すでに国民からの敬意を受けるには汚れ過ぎてゐるパールフェルだが、リリシアに毅然きぜんとした態度を示すことで、第一妃の在り方を教えたのかもしれない。国民の象徴しょうちゆうである皇

妃としての役割は未だ果たす積つりであるらしい。

パールフェル自身は今回の騒動で罪を犯してはいないが、実家グリマルディ侯爵こうやくが事実上の取り潰しつぶとなつた現在、皇妃としての実権など何一つ持つてはいないのだ。

それでも皇妃としての毅然とした在り方を忘れないパールフェルに、リリシアは密かに憧憬しょうけいの念を抱いた。

自分があのように振る舞える日はいつになるだろうか。そんなことを考えた。

難民の避難施設に着いたリリシアはまず、一緒に運んできた支援物資の配布から始めた。

これは皇王府が用意したものだつたが、リリシアが運び、そして配布することで、国民の意識に「リリシア、皇妃」は自分たちの味方」という印象を植え付けようとしていた。

民を騙だますようだとリリシアは思ったが、それで幸せを得る民が過半を占めるならやるべきだとも思った。

総てを救うほどの力はない。

なら、救えるだけの人々は救うべきだ。リリシアはそう決断した。

そういう意味では、レクティファールよりもリリシアの方が余程政治的判断を的確に行えるのかもしれない。

政治は民のためにある。

リリシアの趣味嗜好や矜持きやうぢのためにはないのである。

「おお……お妃さま……」

「皇太子さまといい、此度の皇族様方は慈悲深い方ばかりじゃ……」

今朝焼いたばかりのパンを配り歩くリリシアの手を握り締め、涙さえ流す老夫婦。

夫は車椅子に乗ったまま幾度もむせび、妻は歩くための杖を地面に放り出してリリシアの前に膝を突いていた。

「お二人とも、これまで大きな苦勞を掛けました。以後、皆様の安寧はわたしと、摂政殿下が保障いたします」

「リリシア様……ありがとうございます……！」

「皇太子さまの御武運、この老骨たちにも祈らせて下さい……」

「ありがとうございます。殿下はきつと、皆様のお心を劔鎧として勝ちましょう」

優しく微笑むリリシア。

老夫婦だけではない、周囲の人々さえ彼女の言葉に声を詰まらせた。

今上皇王によつて大きな傷を受けた人々。

彼らは皇王家に対して不信任を抱きながらも、同時に皇王家を信じたいという願望を抱いていた。

二〇〇〇年の間に人々の間に芽生えた皇王家への崇敬の念は、一度の裏切りで消えるものではない。

裏切られても、それでも信じたいと願う人々の心を、リリシアは感じた。

「皆様——」

だから、彼女はもう一度自分たちを信じて欲しいと言うつもりだった。

しかし、その言葉は突然の怒声に掻き消された。

「この裏切り者！」

一人の若い女性が、真っ赤に血走った目でリリシアを睨みつけながら叫び、人垣を割つて現れた。

リリシアの周囲にいた人々は口々に女性の不敬を詰つたが、当のリリシアがそれを制した。

「——」

「反論しないの？ やつぱり裏切り者なのね！ あんたたちは——」

女性はばさついた赤茶色の髪を振り乱し、リリシアの襟元を掴んだ。

護衛のメチェリ以下数名が侍女服の中に隠し持っていた短剣を抜こうとしたが、リリシアの咎めるような眼差しによつて動きを止める。

「遅すぎるのよ！ あんたたちがあと三日早ければ、あの子は死なずに済んだのに！ あ
の人は殺されずに済んだのに！」

「——」

唾を飛ばし、今にもリリシアの喉笛に喰らいつきそうなほど、女性の眼は狂気と悲しみに満ちていた。

リリシアは反論もせず、黙って罵声を受け止める。

「知ってる!? あの子は優しく賢くて、いつも私の作るご飯を美味しいって食べてくれたのよ! あの子はぶつきらばうだけど真面目で、他の兵士さんたちにも頼りにされていたのよ!」

女性は、皇都守備を担当していた皇国軍兵士の妻だった。

彼女の夫は支持貴族軍が皇都を占拠したあとも傭兵たちの無法を取り締まっていた、住人たちの信頼も篤い実直な兵士だった。いつか助けが来ると信じ、同僚たちと街を守り続けていた。

だが、そんな兵士は当然傭兵たちに恨まれる。

職務中幾度も暴行を受け、怪我をしない日はなかった。

それでも彼は心配する妻に大丈夫だと告げ、毎日の仕事に向かった。

そして、レクティファールによる皇都奪還の三日前。

彼は自宅への帰路、傭兵たちに尾行された。

家族を人質に取って彼に立場を知らしめてやろうという傭兵たちの、唾棄すべき策だった。彼が自宅に辿り着いたとき、扉が開いたことを確認した傭兵たちは一斉に彼の家に踏み

込んだ。

多勢に無勢。そう言う他ない。

彼は何人もの傭兵たちに取り押さえられ、家族を人質に取られた。

抵抗は、そこで止んだ。

彼は家族の安全を求めたが、傭兵たちがそれを呑むはずはない。

このとき皇都を支配していたのは彼ら支持貴族軍であり、近衛さえ彼らには手出しできなかった。

傭兵たちは下卑た笑い声を上げながら、彼の前で妻を陵辱した。

やめてくれと叫ぶ彼の言葉にも、やめてという妻の悲鳴にも、泣き叫ぶ子どもの声にも耳を貸さず、傭兵たちは幾度も妻の身を穢した。

自分たちこそが支配者であると誇示するため、都市外を包囲する始原貴族軍の威圧から一時的にせよ逃れるため、彼らは己の欲望を晴らした。

そんな悲劇が二時間ほど続いただろうか。

子どもを押さえ付けていた傭兵が油断した隙に、子どもが拘束から抜け出した。

子どもは助けを呼ぼうと家の外に飛び出し――

「私の目の前で、傭兵に斬り殺されたわ!」

事件の発覚を恐れたのか、それとも急変した事態に動揺しただけなのか。

傭兵たちは子どもを斬り殺し、それに怒りの声を上げた父親の首を落とした。

「あの人の首は、床に押さえ付けられていた私の目の前まで転がってきたわ！　そして彼の首は私の目を見て、動かなくなつた！」

それから三日間、彼女は延々と傭兵たちの慰み者にされた。

家族の思い出の詰まつた家に監禁され、そこで昼夜を問わず罵られた。

心が何度も砕けそうになつた。

そのたび、傭兵たちへの怒りで持ち堪えた。

いつか復讐してやると思い、必死で耐えた。

「あんたたちが来たのは、あの人の首が腐り始めた頃……！」

突如騒がしくなつた皇都。

慌てた傭兵たちはこの三日間一度も衣服を身に着けることができなかつた彼女を放り出し、逃げるように家を飛び出した。

その直後、傭兵たちの悲鳴が聞こえた。みつともない声だつた。

命乞いの声も聞こえた。

しかし、彼女の心は晴れない。

この手で殺してやると思ひ、陵辱された姿のまま夫の剣を持ち出した。

そして玄関の扉を開けた彼女は、これまで散々自分を穢した傭兵たちの死体と対面した。

一人だけ生き残つた傭兵は既に拘束されており、彼女の夫とは違う軍装の兵士たちに連行されるころだつた。

彼女は奇声を上げ、その傭兵に斬りかかった。

「でも、殺せなかつた！」

彼女はすぐに一人の女性兵士に取り押さえられ、剣を取り上げられた。

殺す、殺すと叫び続ける彼女に対して傭兵たちを屠つた兵士たちは沈痛な表情を浮かべ、

魔法によって彼女の意識を刈り取つた。

次に目覚めたとき、彼女は皇都の病院だつた。

家族を失つた悲しみと、復讐を果たせなかつた虚しさ以外、何も残っていないかつた。

「だから私はずっとあんたたちを追い続けた！」

慰問の予定は、慰問先以外に知らされていない。

警備上の問題だが、それは女性にとって不都合以外の何物でも無かつた。

リリシアが現れたと聞いてその場に向かつて、既にリリシアの姿はなく。そんなことを何度も繰り返した。

そして今日、ようやくリリシアの慰問の情報を掴み、想いを遂げるためにここへ現れた。「これは、あんたたち皇族が招いたこと！　自分たちさえ律することができなかつたあんたたちが人を支配しようとしたからこんなことになつた！」

女性が懐から短剣を取り出す。

「さりと輝く白刃に、リリシアの蒼褪めた顔が映った。」

「睨下をお守りせよ！」

メチエリたちが慌ててリリシアから女性を引き剥がそうとする。

しかし、女性の動きの方が僅かに速い。

「報いなよ！これはッ!!」

女性は短剣を逆手に構える。

そこに至り、リリシアは女性の真意に気付いた。

彼女は――

「――ッ！だめえええええええええええええええええッ!!」

「民の血に塗れ、地獄に堕ちろッ!!」

自分の喉に、短剣を突き刺した。

「ああ……ああ……」

真つ青な顔で女を見るリリシア。

その目の前で、女は吹き込んだ。

「じぶっ……」

噴き出す鮮血。

女性は血の泡を吐きながら、リリシアの目を睨み続ける。

崩れ落ちそうになる女性の身体をリリシアが支えようとするが、彼女の力では支えきれなかった。共に地面に倒れ込んでしまう。

リリシアはメチエリたちが治癒魔法の術式を編んでいることに気付いたが、もう間に合わないと悟る。既に、女性の目から生氣は抜け落ちていた。

ただ、その唇だけが震えるように音を紡いでいる。

リリシアは意を決し、女性の口元に耳を寄せた。

「ちの……あかが、あんたら……には……おにあい……」

「――!」

リリシアの頬を伝った血が、口に入り、錆のような味を感じさせる。

他の誰にも聞こえなかったその言葉が、嘲笑を浮かべたまま息絶えた女性の遺言だった。



予定を取りやめようというメチエリたちの言葉に、返り血を浴びたままのリリシアは力無く首を横に振った。

ここで退いては、きっと彼女の言う通りになってしまう。そう感じたのだ。

リリシアは急ぎ後宮に戻って着替え、次の予定へと向かう。その足取りは重く、メチエリたちは護衛以外にも心を碎かねばならなかった。それでも何とか予定を消化し、ついにパールフェルとの面会に漕ぎ着けた。だが、その頃にはもう、リリシアの目にあの女性と会うまで確かにあった眩しい輝きはない。

まるで生きる屍のような空虚な瞳で、パールフェルの待つ離宮へと向かうこととなった。

リリシアがパールフェルに抱いた最初の印象は、『儂い』。

パールフェルがリリシアに抱いた最初の印象は、『脆い』。

お互いに疲れ切った表情で、二人は離宮の庭園にて対面した。

「こうして顔を合わせるのは二度目ですね、陛下」

「はい、先日は碌にお話しする時間ありませんでしたから……」

パールフェルは喪服である黒衣を纏い、面紗の向こうからリリシアを見詰めてきた。

その瞳に在るのは、ただ諦念と疲労のみ。

他の多くの皇妃が実家へと帰参する中、ただ一人帰る場所もなくレクティファールが用意した離宮へと下がることしかできなかった彼女にとって、これまでの総てがただ疲れるだけのことだったのだろう。

この国で彼女の味方は殆どいない。

いや、総てが敵と言っても過言ではないはずだ。

此度の騒乱の原因は、間違いなく彼女の夫にあるのだから。

「今日は、陛下にお伝えしたいことがあってお招きました。ご多忙の中、ご足労頂き感謝いたします」

深々と頭を下げるパールフェル。

イズモの血を色濃く受け継いでいるらしい黒髪が、面紗の向こうに見えた。

「こちらこそ、ご挨拶に伺おうと思っていながら、此度の遅参、お許し下さい」

リリシアも謝罪の言葉と共に頭を下げる。

立場としてはリリシアの方が上であるが、パールフェルは皇妃であり、リリシアにとって義母のようなものだ。礼を失する態度は取れない。

パールフェルはリリシアの言葉に苦笑し、テーブルの上に置かれたお茶を勧めた。

「亡き陛下がよくわたくしに送ってくださいだった茶葉です。向こう見ずなところもあった陛下ですが、わたくしたち妃にはお優しい方でした」

「——頂きます」

そっとお茶を口に運ぶリリシア。

香りも良く、口に含んだお茶から広がる味わいも深く、芳醇だった。

恐らくリリシアが知らない種類の茶葉だが、一口で彼女の心を掴んだ。

「イズモ産の落葉茶と申します。お気に召されましたか？」

「はい……とても……」

パールフェルはリリシアの答えに微笑み、自分も一口お茶を含んだ。

しばし懐かしげに磁碗の中を見詰め、庭園へと目を移した。

「お話ししたいことというのは、陛下のことです」

「はい」

リリシアは居住まいを正した。

いつか来ると思っていた話題だが、やはり感情が波立つ。

先程の女性の姿が、幾度も心にちらついた。

「世では陛下は裏切り者、愚皇と呼ばれているようですね」

「はい……」

答えながら、俯くリリシア。

民にとって全く正当な評だが、目の前の女性にとってはまた別だ。

「お気になさらず、陛下が気に病む必要はありません」

パールフェルは諦めきった表情で、リリシアを慰める。しかし、その目に映る悲しみは

大きく、隠しきれしていない。

「陛下のなしたことを言えば、わたくしたちが犯した罪を言えば、確かに正しい言葉です。民たちに何と言って詫びればいいのか、正直考えつきません」

パールフェルが表に立てば、民たちの怒りは再燃する。

レクティファールはそれを恐れ、騒動の罪をグリマルデイ侯と当代皇王に被せることで事態の鎮静化を図った。

だからこそ、パールフェルは民に石もて追われること無く、この離宮で静かに暮らしてられる。

「ですが、摂政殿下にだけは陛下のお心を知って頂きたいのです。されど、わたくしが殿下の下に参じれば、下衆の勘繰りをする者も現れましょう。殿下の評判に傷を付けることにもなりかねません」

「だから、殿下が北にいる間に、わたしをお呼びに……？」

「ええ」

パールフェルはレクティファールが北に向かっていている間に、総ての決着を付けるつもりだった。

これからの皇国の舵取りを少しでも容易にするため、そして、亡き夫の願いを叶えるために。

「陛下は——あの方はこの国を心から愛しておられました」

リロシアは黙り込み、パールフェルの言葉をひたすら受け止める。

「北の帝国、西の連合国、どちらも我が国にとって大いなる脅威。東のイズモとて、〈天照〉を擁し油断ならない相手です」

パールフェルは静かに続けた。

「ですが、先代陛下はそれらの国々と友誼を結ぶことに執心され、我が夫はそんな父親の姿勢を批判し続けていました。そんな弱腰では相手に付け入られると」

それは、確かに先代皇王の外交姿勢の一側面だった。

事実、帝国は先代皇王の外交姿勢で勢い付き、こうして大規模な軍を差し向けてきたのだ。

「だから、あの方は自分がこの国を守るのだと」

父が頼りないのなら、自分がこの国を守る。今上皇王はそう決意した。

現れたはずの、白を害したという噂も、そこに原因があるのだろう。

皇太子たる、白の教育は当代の皇王が担当する。

ならば、当然当代皇王の政治姿勢が、白に色濃く継承されることになるだろう。

つまり、父の薫陶を受けた、白が皇王となれば、この国はこれまでと変わらず他国に対して弱腰で居続ける。

だから彼は、白を廃して自らが立った。それが事実では無いとしても、人々はそう思った。

「今から言えば、先代陛下のお考えも理解できます。ですが、当時の夫にも、わたくしにもそれができなかった。先代陛下は国を滅ぼしてしまう、本気でそう思っておりまして」
守りたい。

そう願ひ、今上皇王は権力を求めた。

誰にも虐げられることのない、絶対的な権力を。

「――陛下はその想いを、貴族たちに利用されたのかも知れませんが」

先代皇王の御代、非主流派であった今上皇王の支持貴族。

彼らは権力を手に入れるため、今上皇王を誑かした。

「貴族たちは言葉巧みに陛下を陥れました。言っても信じては貰えないでしょうが、多くの忠臣を遠ざけたのは陛下の意志ではなく、彼らの思惑だったのです。彼らの忠誠心は見事なれど、今は陛下の想いの妨げになる、と」

今上皇王は彼ら忠臣を疎みはした。

だが、その皇国への愛情に疑いなど持たなかった。

だから、いつか分かり合えると思ひ続けていた。

今上皇王にとって、彼らが敵となる理由など、ありはしなかったのだ。

「結果として、陛下は多くの忠臣を遠ざけ、自分の成すべきことに協力的な者たちを権力の座に就けました」

この処遇は、一時的なものとなるはずだった。今上皇王の願いを忠臣たちが理解することができれば、すぐにでも中央に呼び戻すつもりだった。

「ですが、事態は最悪な方向へと動き始めました」

それは、連合の侵攻と、始原貴族の皇王に対する裏切り。

「陛下は、このとき壊れてしまわれたのかもしれませんが」

疎み、それでも信じていた始原貴族の裏切り。

だが、その始原貴族もまた、今上皇王に裏切られたと思っていた。

彼らの行き違いは、致命的な齟齬となつて皇国に未曾有の惨禍をもたらす。

「陛下は何としても連合の侵攻を阻止しようと軍を集めました。しかし、その策も失敗だったのでしよう。このとき陛下が胸襟を開いて始原貴族たちと話し合つていれば事態は好転していたかもしれません。ですが、始原貴族を信じられなくなつていた陛下は、自らを支持する貴族たちに軍を集めさせ、それを連合にぶつけた」

結果は、惨敗。

さらに今上皇王の思惑を超え、始原貴族たちも軍を発する動きを見せ始めた。

「始原貴族たちの裏切り、陛下はそれを嘆いておられました。そして幾度も敗退を重ねる自らの軍、既に陛下のお心は限界でした」

やがて連合が皇都を包囲したとき、今上皇王は命を落とした。

それから始まったのは、まさに悲劇としか言いようの無い出来事だった。

「陛下がお隠れあそばされたとき、わたくしは『やはり』と思つておりました。ですが、陛下がどのようにして命を落としたのか、未だ真実は分かりません。自ら命を絶つたのか、貴族の謀反によつて弑されたのか、或いはそれ以外の何かが起きたのか」

パールフェルはリリシアに向き直り、再び頭を垂れた。

「陛下の罪は消えませんが、陛下の願いだけは殿下にお伝え頂きたいのです。あの方は間違いなくこの国を愛し、守りたかった。その想いだけは、殿下に受け継いで頂きたいのです」

皇太子たる、白の教育は当代皇王の役目。

ならば、レクティファールに歴代皇王の想いを繋げるのは今上皇王であつてほしいとパールフェルは思った。

「どうか、殿下にお伝え下さい。この国の皇王は、ただ一人の例外もなく皇国を愛していただ」

「――」

リリシアは瞑目する。

頷くことができる。

だが、それは民の想いを踏み躪ることにはならないだろうか。
今上皇王の想いを肯定することは、民たちの苦しみを肯定することにはならないだろうか。

「どうか、お願いします」

パールフェルは震える声で懇願する。

彼女にとって、これが妻として夫にできる最後のことだった。

それは、リリシアにも理解できた。

「——分かりました」

「あ、ありがとうございます……！」

そして、ここで自分にできることは、ここで領いた罪を背負うこと。

あの女性の血を纏い、生き続けること。

「我が名に誓って、陛下の想い、殿下にお伝えいたします」

あの方のため、罪を背負い続けること。

「きつと、レクティファール殿下も理解してくださるでしょう」

民たちの怨嗟を受けながら、微笑み続けること。



第二章 戦いの兆し

「摂政付参謀」

そうリーデが声を掛けられたのは、司令室にもっとも近い士官用食堂のことだった。遅い昼食、早目の夕食、どちらとも言えるような時間帯に食堂に訪れたにも拘わらず、そこは随分と盛況であった。この戦役で何度目かの限定休戦。要塞内は設備の補修や負傷者の後送のために戦闘中とは別種の忙しさがある。

「こつちだ」

リーデが視線を巡らせると、奥まった一席で手を振る男の姿があった。

砲兵参謀。陸軍砲兵科大佐の階級章と兵科章を着用した吸血族の男だ。

「——何か御用ですか？」

自分の食事の載った角盆を抱え、リーデは砲兵参謀の下に近付く。

そこには、砲兵参謀の他に何人かいた。いずれも金色の参謀飾緒を着けた主任参謀たちである。

「一緒にどうかと思つてな。——殿下のご様子も聞いておきたい」

砲兵参謀は声を落として答え、立场上、リーデはその求めに応じることを選択するしかなかった。

摂政付参謀は、摂政と他の軍人の間を取り持つことも役目の一つである。

「機兵参謀殿も、おられたのですか」

「——たまには、な」

リーデは主任参謀たちの中に、機兵参謀の姿があることに少しだけ驚いた。

これまでの印象からすれば、こういった場で同僚と同じ席に座り、食事をとるなんて想像できない。

「どういった心境の変化かは分からないが、機兵参謀の方から声を掛けてきたんだ。前まではどれだけ誘つても、袖にされてたんだがなあ」

騎兵参謀が蒸し芋を頬張りながら、感慨深げに呟く。人間種の中年男性で、この集まりの中では最前任であった。

「殿下に色々教えてもらったのです」

機兵参謀の言葉に、リーデの眉がぴくりと動く。不快ではないが、理解できない。

「色々、ね」

龍族女性の航空参謀が面白そうに目を細め、貝練麵を突き匙に刺したまま喉を鳴らした。